

4202

竹柴諺藏著作

演劇脚本
鹽原多助經濟鑑

全拾册之内
第一卷

088577-000-8

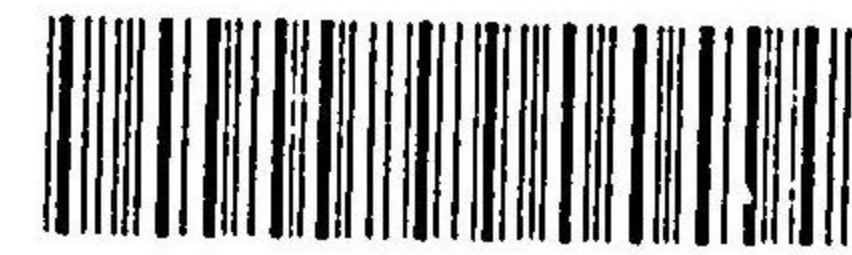
特52-583

鹽原多助經濟鑑

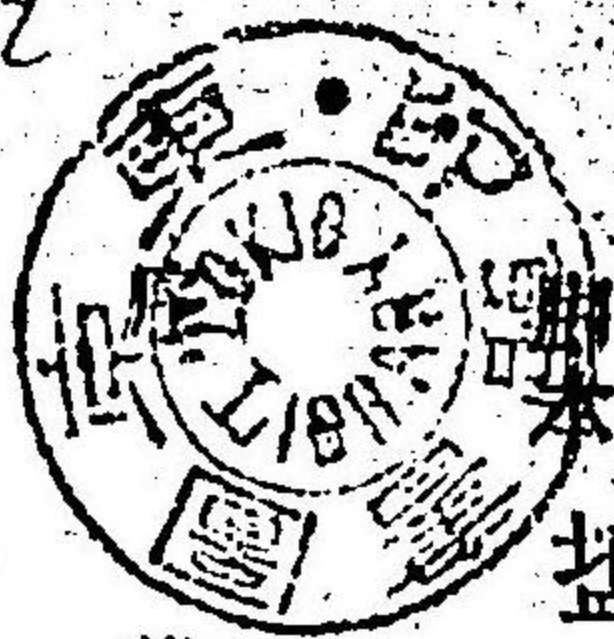
竹柴 諺藏 / 著

M22

DBJ-0236



W/O 17910 / 22



演劇 鹽原多助經濟鑑

場 割

幕

野州大原村茶店之場
 上州東口逢貝村之場
 獵師鹽原角左衛門住家之場

中仙道鴻の巢驛田本之場
 保泉村お龜危難之場
 岸田右内墓所之場

本所御竹藏前之場

百姓鹽原角左衛門内之場

地藏細手雨舎り之場
 沼田小竹屋敷之場
 庚申塚圓次郎殺之場
 下新田鹽原住家之場

百姓鹽原多助内之場
 分家太左衛門住家之場
 沼田ヶ原麥馬別之場

七 幕 目

上州八崎在庵室之場
岩上村多助盜難之場
吾妻川岸邊之場

八 幕 目

筋違内廣小路之場
同戸田家門外之場
鹽原角左衛門長家之場
佐久間町炭問屋之場

九 幕 目

本所四ツ目掛茶屋之場
藤野屋空右衛門内之場
相生町多助住家之場

大 話

鹽原多助婚禮之場

序 幕

役人替名

獵師 鹽原角左衛門

百姓 鹽原角左衛門

岸田 屋 卯之助

惡者 壹人

大原村茶店の九兵衛

同 婆々お市

下 男 久助

百 姓 權十

同 作 十

同 三 八

角左衛門 伴多助

獵師角左衛門女房お清

演劇 鹽原多助經濟鑑序幕

野州大原村茶見世之場

本舞臺三間の間落間の家体板葺の葺卸家根是へ細括の竹の押側を取附けごろたの壓石を置
 き三方葺卸の平家見附一面の荒壁此中三尺の出這入口是に細暖簾を掛け落間に床几三脚列
 べ軒先へ馬の草鞋を釣し駄菓子多葉粉の看板一膳飯の寄かけ障子を建上手拭だれの馬小屋
 上手へ寄せて立木の植込下手杉の生垣脊後様名妙義山を見せたる中遠見都て野州大原村茶
 見世の体爰にお市胡麻搥がづら世話形り田舎婆々の拵へにて手拭を冠り庭の上にて草鞋
 を作り居る作十權十三八百姓 作男の拵へにて床几腰を掛け烟草を喫居る此模様宜敷在
 郷唄にて幕明く「權十」ヤア唄アさん今日の例より早いやうじやのウ「お市」早い何の云ふ
 て一時も差ひ升とへ「作」併し相變せ精が出升のウ「三」何でも金が出来か、ると面白と見
 へるのウ「市」何の金どころウチ、其金持で思ひ出たね前方は下新田の角左衛門様には逢ッ
 しやらぬウ「權十」チ、逢たごもく前刻講の口で會たが何でも今日の戸海村まで用が有て往
 どいつてじやが何ぞ用敷「市」用と云ふのは駿馬の賣物が有といふて一昨日下の市で親仁殿
 が買て戻ったがマア此馬を買人は新田の角左衛門さんよと無いからなア「權十」爾ういノウ夫
 なら前刻いへば宜ッたがノウ「三」ナアニ是非爰へは寄るだんべエ「作」唄アさんの世事が好

うらのウ」市「ホ、何を言ッしやる」「ト是を唄に成ッ下手より作男久助木綿着流し尻
 端よ百姓の拵へに木綿の風呂敷包を背負出く来り」久助「ヤレ何方も御免なされ」權
 お前は角左衛門さんの久助じやアないか」久「サア内の旦那が戸海村の權左衛門様の所まで
 行から先へ往ッて居ると云ふく出て来たが何だか小喧しい故一ふく爲て行くべいと思つて
 よウ」三人「爾かな」市「チ、久助さんかな此間は大に有難うムりました娘も大喜び」久「何の
 噂々構わねへで」市「ナアニお前角左衛門様の處なればこそだ」權「ム、そんなら此間下新田
 に芝居があつたが夫を觀に行しやツたか」市「サア喜でナア歸て来てから何んを狂言だと言
 ツた所がナアニお前辨慶編を着たお武士が出て来て脇差の柄へ徳利を提て居たが餘ッ程酒
 が好を武士で跡から機織娘が小田巻を持って出て来たを脇差抜て突貫たどへ」三人「ム、市」
 夫が妹背山てふ狂言だと云ふ事だヨ」權「何しろ娘子の僥倖だのウ。イヤ長いと遊だ」作「ド
 レモウ一ト息遣かさうか」久「儂もお眼珠喰ぬ内往きませうか」市「そんならモウ行ッしやる
 か久助さん角左衛門さんと來さつしやるかノウ」久「どうせ爰を通るから寄ッしやるにやア
 違へねへヨ」市「そんなら宜とどあア」皆々「そんなら畑アさん」市「お稼ぎ被成ヨ」「ト是を宜
 敷捨せよふにて皆々上手へ這入是を又唄に成り上手より岸田屋外之助編の着附脚絆草鞋が
 と納戸の半合羽振分け荷物背笥を背負ひ其跡より獵師惣原角左衛門革の袖なし筒袖の着附

け木綿の踏込袴山獵師の扮装にて出て来り」卯之助「旦那様夫では恐れ入ます故モウどうか
 是で御免を願ひ升」角左衛門「イヤ〜モウ开首が大原村の茶店故其所まで出たれば跡は往
 還マア兎も角も茶店まで参つた上未だ篤ツくりと言さねば成ぬ義の有ゆへにアノ茶店迄参
 つてくりやれ」卯「ハイ左様おれがお供致でムり升う」「ト是を宜敷言ながら茶店へ来る」角「
 マツ〜是へ兎やれ」卯「イエ〜夫でと恐入ますマツ旦那から」角「イヤ〜其様申さつと
 む」卯「イエ〜夫は」角「左様おれが掛ると仕やう」「ト上手へ角左衛門下手に卯之助腰を
 掛るお市茶を汲ぎ出て」市「マア一俵お啜り被成ませ」卯「是は〜旦那様から」角「イエ〜
 其様に斟酌致ては却て迷惑の妻女は現在拙者の妹なれば言ば兄弟同前なるに其様な斟酌
 みては却て小生迷惑致と」卯「イエ〜勿体ない誰あろう安部豊後守様の藩中にて八百石所
 領の惣原左衛門様如何に時世とは言ながら此州深ひ片邊陲に獵人と迄お成り被成たかと思
 ひ升れを實又泪が溢れ升る夫には引替小生めは八年以前にお妹御のお龜様と不義蜜通揚句
 になれ屋敷を出奔なし以前の苗字名前も其ま、に岸田右内を岸田屋卯之助と改名て今では本
 郷春木町に夫婦幽かな旅商人夫に附ても思ひ出のは旦那様御夫婦に是非とも此身のお詫を
 と思ふに甲斐ない御浪人御住居さへも分明らかと聞て身も夜も泣き明し此年月を所々方々
 お尋ね申た甲斐あつて此野州にてお目に懸るとは實以て存じませませモウ此上は貴君をば是

非く以前の武士におさせ申ねば眞利の程が恐ろしうムリ升る殊に坊ッやんの御伶俐といひモウく片時此山の中にお置き申こと出来ませぬ」角「何日に變らぬ右内が信實々の拙者が甥に當る當時宇都宮の城主戸田侯の御内にて野澤源作と申方より是非とも重役に相談し身の落着を計らへば急ぎ参れと度々の招き我は二君又仕せとも貴て伴多助めを世に出さんと思がゆへ其準備を致さんと思ふ折柄恰是今年で四年跡後の山が崩れ非常の出水の其爲に田地は素より衣類まで悉皆流されて失しゆへ出るにも出られず據なく斯の活業夫故先刻家内めが你へ頼し支度金五十兩さへ之あらば親子三人身準備なし固の身分に参せとも大小帶せし武士に成る時機は有りながら僅五十金の金故に夫さへ思ふに任せぬとは能く因果を吾身の上右内推量の致てくりやれ」卯「サ、其お精神を承り有り在にも有れぬ右内が身跡去りながら唯今では少分旅商人ではムリ升るが旦那様が武士に成なされ升る其か支度金の五十兩は屹度調へて持て参り升る」角「然らば你が其金子を調達致せと申のか」卯「唯今も申升る通り以前の御報恩の爲め身を粉に碎きましては決度調達仕りまする」角「ア、去りながら言ば些細な旅商人が」卯「サ其御心配もムリませうが又旅商人と申ものは意外な儲の有るものでムリ升ゆへ唯今と申ては出来ませぬと決度來年の二月迄には其金子を持参致して参り升ればお氣長うムリ升るが萬望夫までお待被成ませ」角「イヤ夫の

手前も急で急ぬ事なれば調達さへ致し呉なば何日でもよいア、持べきもの臣下あり此事歸宅致しおは女房清に申聞けなば無怡ふことで有らう」卯「小生も一刻も早く立歸り金子を調達なしお喜びのお顔が拜見致たらムリ升る」ト是を時の鐘に成る兩人こなし有て「サ、早いやうでもモウハツ時でムリ升るサア旦那様には何卒お構ふ御歸宅遊をて下さりませ」角「黙れ苦しく思おも你在唯今の志を少も早く立歸り荆妻清又申聞け安心するで有らぬ」卯「どうぞ左様被成て下さりませ」角「そんなら右内」卯「旦那様」角「必ら吉左右相待申すぞ」ト是を唄み成り角兵衛門諒を惜むこあし有て上手へ這入る跡又卯之助こなき有て「卯」ア、以前に替る旦那様僅金から五十兩有る處には在り餘り口で手輕は言ふもの、其日暮の旅商人何うして是が一時に調達出来やう筈もなくエ、おゑいと云ふ兒がなくはお龜を勤奉公に遣てなりと調へたいが子供が有ては夫も成せエ、任地飯宅た上で亦女房にも相談をして何うでも成るか○エ、何じや知ぬが氣かむしやくまやと心もちが悪う成て來た○モシ茶店のく」ト奥よりお市出て來り」市「ハイく何ぞ用かの」卯「内方に酒があるか」市「ハイ酒といふても地酒じやが承知あら吞せ賣べいから」卯「何でも宜敷一寸一口煙て下され」市「ハイく宜敷とんと」ト是にてお市酒德利を土釜の中へ浸る是を唄に成り向ふより新田の鹽原角左衛門木綿荒綿の袷羽織着附納戸の股引足袋草鞋がけにて出て來り」

角「今途中で聞ば九兵衛の婆々が乃公に用が有との事何じや知んがどうせ門を通る事ゆへ
 聴て遣うか」「ト本舞臺へ來り」「婆アさん此間は逢ませぬのウ」市「チ、角左衛門様さつきか
 ら噂を仕て居たとおでがんす」角「一寸來てへと思つたが秋初になると川が多ツて來られぬ
 へでマア嬬あさんも例も健康で結構じやのウ」市「ハイ達者な計りで困り升」角「然うして内
 む爺さんは居やんとかのウ」市「ハイ宅にでがんすチイ阿爺角さんが來やんしたヨ」「ト内に
 て」九兵衛「チイ〜」「ト言あがら出て來り」「チ、角左衛門さん實に御不沙汰を致やした時
 に旦那へ貴下もお目に掛やうと思つて非常宜ひ馬を買て來ましたが何と活ての呉れ升ぬか
 か」角「馬なら結構じやが何歳ぐらいじや」九「何歳といふて青蹄で三歳五ヶ月に成る馬で宜
 馬だマア見せるから待て下せへ」「ト言ながら上手の馬小屋へ這入お市は酒の暖しこなしに
 て膳の上へ酒徳利と茶碗を乗せ持て出て來り」市「モシお客様肴は何にもムんしねへが客
 月高崎から廻つた。おゑらい鯖が有が夫なら上げませうか」卯「何でも宜しいどうぞ早うし
 て下され」市「ハイ〜」「ト宜敷卯之助は始終思案のこなしにて酒を呑む此時馬小屋より九
 兵衛馬を引き出て來り」九「サア旦那此馬を見て遣つておくんかんし」角「成程ソリヤ宜ひ馬
 だ」九「モシ旦那此馬の實に珍らしい馬で吾等一ツ起して噫一ツした事がなく何様に曳て引
 廻しても足に血溜り一ツ出來る馬じやアねへよ」角「イヤ此馬なら爾だらう」「ト言ながら角

左衛門馬の齒を視たり爪を見たり前足を撫たり種々こなしあつて感心の思入」「どうも宜ひ
 馬だコリヤ買てへ一休何の位じやへ」九「サア旦那の事だから五兩五粒サ」角「五兩五粒じや
 高價なア」九「高と云ふても五兩五粒の價值とあるよのウ」角「成程價值は有だろがモウ少
 し負らんか」九「直打又如才があるものか」角「負らば買と仕様が實は今日ハ戸海村まで田
 地の懸引に來た故にモシ向ふにて今日の賣買又成なけりやア歸に直と買て行ふに依てマア
 取敢て一寸手附を置て行ふ」ト言ながら床几の所へ黄八丈木綿の胴巻より金包を出て其裡
 より一兩出を是まで酒を傾居たる卯之助は此金包を見て羨まきこなし又氣を替へて酒を
 グイと呑み」卯「エ、儘に成ぬが浮世の中」市「モシ飯は麥だが宜敷カナ」卯「イヤコリヤ迂闊
 いつた事飯ではムらぬわへ」市「ハイ爾かのウ」角「そんなら手附に壹兩置て行升から萬望他
 へ售ねへやうよ」九「何の貴君大丈夫でムりまをる爾して是から戸海村へお越でムりまする
 か」角「是非行にやア成ぬけれとどうも胴巻の金が重ツて堪らぬへ」「ト是を聞卯之助は頻り
 む金が欲き思入あつて又イヤ〜と氣を換ること宜敷」九「旦那なんなら戸海村まで送りま
 せうか」角「何のお前知む道じやアあるまいし獨で結構じや」九「そんなら旦那」角「九兵衛と
 ん」市「お歸路を待升せ」角「能うぞんす」「ト唄に成り角左衛門上手へ這入」九「此馬も角左衛
 門様の所へ行やア仕合だ」市「何でも金が無にやア成んねへさア」九「爾うヨ彼の旦那なんぞ

は年が年中金に纏まつて今も懐に澤山の金だ丸で吾輩の礫か瓦のやうだわへ」市「ほんに然うじや」ト是を聴て卯の助は屹度思接のこなしにて角左衛門が後を見送り居る九兵衛馬を上手へ曳て這入卯之助は始終角左衛門が跡を見送居ていつそといふ思入にて」卯「それ」ト行かけるをお市見て恟りなし」市「モシ客人」ト一本差の鐙を捉へる」卯「チ、吃驚した」ト卯之助宜敷吃驚するのが道具替りの知らせ」市「酒の價を」卯「チ、」ト卯之助先へ心の急くまなしにて錢入より錢を出して拂こまお市は心得ぬこかし此仕組宜敷早めたる合方にて道具ふん廻す」

上州東口逢貝村之場

本舞臺一面山亦山上手に峯をわけたる山の遠見人の出這入あり中央清水の流れ傍の丘の上夏來ても皆一ツ葉の一ツ裁芭蕉と彫し苦むしたる碑是に松の大木舞臺花道共岩山のかねを出し上手の取り合より清水流れ下手は赤城山の遠見日覆より松の釣枝都而上州逢貝村山道入り口の摸様水の音こだま山おろしにて道具納まる」ト向ふより以前の鹽原角左衛門出て來り」角「彼はいふ内爰は逢貝村の入り口次良兵衛が田地の一件も早く取引が爲たいもの夫につけても今九兵衛が所の彼の馬は近年ふねへ上馬だ彼が具の駿馬とも云ふのだらう萬望よく飼つたたいものだなア」ト言ながら本舞臺へ來る此時戸屋の内にて」卯「チ

「トばた」に成り向ふより以前の卯之助走り出て來り」卯「且那樣暫く」お待下さりませ」ト息の切れしこなしにて云ふ角左衛門不審のこなき有て」角「チ、慥しい見れば未見た事のない旅の人儂に何ぞ用がごんすのか」卯「サア貴公にお願ひ申にや成ぬ事故お跟を慕て参り升たモシ願を適へて下さりませ」角「何じや知ぬが儂の迹を追蒐、頼どソリヤ一休何うしたのだ」卯「サア何を匿しませう小生は後の立場で休で居り升た旅の者でムり升る」角「ム、成程九兵衛が店で休で居た旅のお人夫が何を拙者よ用があるか」卯「サア其用と申升るは近頃耻入升た義おれども萬望御所持の金子が拜借致さうムり升る」角「サア」卯「サア何をか匿申ませう拙者は岸田右内と申升た聊兩刀を佩ました身でムり升るが當時は御覽の如きの商人と成升て江戸は本郷春木町にて岸田屋定助と申升る小生の主人が事故あつて浪人おし小川村に住居なま居り升るをば昨日料を巡り會ひ段々様子を承ければ五十兩の金さへあれば固の身分に立返るとの談話立程も欲は思へど何を申も唯今にては其金子の調達出來せ致し方なく來年の二月迄と受合て立別れる其折に貴下が馬の手附金お渡被成る、其金子は百兩餘の金包せめて彼金子が半分あつた事なれば御主人をば世に出るものと思へば專堪はこそ濟ぬ事とは存せまが右申通の事ゆへに何卒來年二月迄に屹度返濟致升れば萬望五十兩の金子をばお貸被成て下さりませ」ト卯之助こなしにて

云ふ角左衛門是を開扱はといふこなしよく桐巻を確と押へながら」角「ハ、ハ、ハ、往來稀なる山中威て奪の古臭く新狂言の書ごととて深切づくめで取うとソリヤア行ねへ癩又まろへ」卯「何の貴公小生が其様な事を致ませう姓名までお明申位ゆへ決して盜賊杯ではムリませぬ御得心さへ下さり升たら是より直に主人の所へ御同道申兩人にて神印の上拜借仕り升るごうも一度び主人を世に出しませねば小生が濟ませぬ神かけ御損はかけませぬ故萬望來年の二月まで」角「エ、喧々わい夫程金が入れば何故其處で都合をせぬのだ往來稀な山中で乃公がどう巻を見た故に賺て奪といふ汝盜人に相違ねへサア名士へ來い」卯「滅相な却々爾いふ者ではムりませぬ」角「エ、其泣面を仕やアがつて是を喰へ」卯「言ながら握拳にて叩く」卯「アイタ、ハ、ハ、ハ、」角「コレ五十兩の金を見せ不識の者に貸も能く出来た是間から鐵坂越で追劔が流行のも大概汝であらう諸人の助けだ汝の様な奴は斯して遣は」卯「卯之助の誓を掴み引付けて」サアどうだ盗人だと白状するか何うだ」角「○イケ張合のない野良だ斯して遣か」卯「ト散々に蹴倒れ卯之助無念を耐へて」卯「サ、其所望さへお叶へ被成て下されば此身は何のやうに成りとも決してお手向は仕りませぬ萬望此身にお腹の癒るやう御存分に被成た上お貸被成て下さりませ」角「何だ身出しはせぬ○コリヤ可笑ごうで手出も成まいか」卯「サ、ハ、ハ、實に小生主人は彼のやうな所におく人物ではムりませぬ江

戸表へ参りさへ致しなば百石拜領に登庸は瞬間モシ爾う成る時は來年二月は扱置き今月中にでも御返済を致升れば」角「黙れ」卯「ハイ」角「黙れおろろ」卯「ハイ」角「手前は何と言た打れても殿かれても言分は無と言たな」卯「そりやモウ何様にも此身の事」角「チ、能く言ツた斯して遣るか」卯「ム、」卯「卯之助無念を堪へる角左衛門こなし在て」角「エ、未だ此様な事ぢやアこたへぬ」斯か」卯「ト有合したる五郎太石を以て眉間を打是にて卯之助額破れて血の流れるこなし」大腰拔めが」卯「アイタ、ハ、ハ、」卯「ト卯の助血沙の流しを見て吃驚せしこなし有て」ヤ、コリヤ而体迄も」角「黙れといふ故打ッたがどうだ」卯「チエ、ハ、ハ、」角「夫とも汝欺したか」卯「イエ」何の偽を申ませう」卯「ト身牀の痛むこなし有て」サ、ハ、ハ、モウ是で御充分でムりませう何卒此上はお願ひ申た金子の義を」角「否だ」卯「かんと」角「是から你を名主の所へしよ引で行のだ」卯「是にて卯之助屹度成り」卯「ム、無て成ぬ金故も無念を堪て手出もせづ耐へる此卯之助今は町人なれば連原は岸田右内が而体能も土足にかけ居つたなア」卯「刀の柄に手を掛無念のこなし角左衛門見て吃驚なし」角「ム、そんなら你刀の柄に手を懸て殺のだなア」卯「エ、ハ、ハ、」角「イヤサ殺のどろろ○人殺」ハ、ハ、ハ、」卯「ト是にて卯之助こなし有て」卯「ア、イヤ何も貴公を殺とは申ませぬ自由に成ば金を貸と被仰ツた故自由に成た其上で金を貸ぬと被仰る故ツイ」卍立紛

れに柄に手をかけた計り萬望夫が御此の立事なら御免被成て下さりませ」角「エ、彼云へば斯言と是が盗人たけぐ敷のだサ、切れ人殺ヤア——」卯「モシ何を被仰り升る」角「人殺くくヤア——」卯「モシ何も殺は致まませぬ踏雲く」角「エ、人殺しく」卯「ト言ながら角左衛門は卯之助が旅の一本差を抜て棄ろうとするを卯之助耐はさせじと挑むこなしド、角左衛門は刀を放棄て一散に上手へ逃て這入卯之助も刀を捨て同上手へ眼を追て這入此道具木なしにてぶん廻と」

本舞臺一面嶮岨なる岩山所々に生木を排置上手莫大なる張物の岩山是は藤巻を纏とし日覆より杉の釣枝都て敷坂峠谷間の模様山おろしバタくにて道具納まる」卯「爰に角左衛門卯之助の兩人摺合の立廻り宜敷卯之助は威しに刀を持って居るを角左衛門の誠と心得色々立廻り宜敷あつてド、角左衛門 躓仆れると卯之助上へ乗懸り」卯「サア旦那金を貸て下さり升るか左もさくば刀で貴卿をば一ト突み致し升るがモシ旦那どうぞ貸て下さりませ」卯「モシ旦那く」卯「ト上に乗つて刀を差附ながら頻に頼むを角左衛門肯聴こなしにて」角「人殺ヤア——」卯「ト助けて呉——」角「人殺ヤア——」卯「サア何卒貸て下さりませエ、聞分のさ」卯「ト角左衛門を下に敷ながら涙を拂う此時上手の岩山の上へ子役の壺原角左衛門獵師の拵へて出て來り鉄鉈を構へて卯之助を睨ひ打是にて本鉄鉈の音にて卯之助は墜れたるこなし提

刀に草を掴み苦みながら含紅を吐く是よて角左衛門の顔みか、る角左衛門驚愕なして」角「ヤア人殺くくヤア——」卯「ト彼方此方へ轉げる是を宜敷本釣鐘を打込後の山道を廻つて以前浪人壺原角左衛門鉄鉈を提げ出て來り」獵師「旅人怪我は無ッたか」角「ハイお蔭様で助り升たが何處か切られた所も知れませぬ」獵師「イヤく夫は打留たる賊の血汐のか、りし事と相見ゆる」角「道理で痛くも何ともムりませんがモシ見受升れば獵人様でムり升るが既に此奴に殺れる所をば助り升たもお前のお庇陰何を匿さう後の大原村の九兵衛が立場を儂の懐よ金の有のを附込で跡を追て來た處種々どの偽涙埒が明ねへ處から名主へ引うと争うたを運凶くも下に成り將に殺される處をばお前が發た鉄鉈で危ひ生命を助り升たモシ有難うムり升る」獵師「イヤ却々近所の者として油断の成ぬ山中ゆへ向後共に意を注るがよいシテ殺殺し盗人は」角「爰よくたばつて居り升わへ」獵師「ドレ」卯「ト言ながら死骸を視て」角「エ、どうじや」卯「實に右内にて有てくくヤ、ハ、ハ、ハ、」角「そんなら是」獵師「拙者が家來じや」角「エ、致たなア」卯「ト言ながら死骸を抱きこなし有て」氣を慥に持て右内ヤア——」右内ヤア——」卯「ト是にて卯之助苦きこなし有て目を開き」卯「チ、旦那様」卯「ト主人の顔を見詰言を云ひたきこなし」獵師「コレ右内汝も原は武士では無か如何に零落たれば逆何故此様な淋しい量

見にて成て呉た濁して盗泉の水を呑むと汝も是を知ぬではなし何故他人此所有を奪氣に成た手前とは露しらす是なる旅人が強盗に遭しと心得此人を救助やう計かり打留たるコレ右内悪事の悪事罪の罪許して呉よコレ右内」ト悲で云ふ右内も苦痛を堪へまこなし有て」卯「モシ旦那様勿体ない盗賊ならぬ身の辨解か開被成てさ下りませ」ト是を篠笛の合方に成り」昨日貴卿にお目に掛り夫から續て御新造様にもお物語今日大原の立場茶屋で五十金に才覺をと家來の小生へのお頼此旅人が其際に金を所持して居り升のを一ト目視するより心迷ひ是非とも貴公を御世に出申たい一心が却て斯いふ間違にて貴卿のお手に懸て死るはまだしも本望永らく御恩を蒙り升た御主人のお妹御を連出し出踪やうな此右内天罰主罰報ひ來て死るはコリヤ是當然唯此上のお情に江戸は殘去ある女房お龜娘かゝいが聞升ても全くお主を御代に出とて心得違を致せしと必ぞ盗賊の汚名はお許下さりませ未だく申上たき事あれど最早かなぬ」ト此臺詞の内卯之助漸次弱るこなし」ナ、ナ、ナ、南無」ト掌を合せ落角左衛門愁のこをし有て」獵角「コリヤ右内エ、モウ緒が切れたかエ、情ない事を致たわい」折角巡り逢ながら逢は忽ち此体裁素を糺せば爰を此方より起りし事嘸女房に聴たら歎くであらう宅へ戻るも戻られづ不憐な事を致たわい」ト愁のこあし百姓角左衛門も是まで俯向て居て此時こなし在て前へ進み」角「最前からの容子をば殘

らす是で開ましたが彼の時金を貸て遣は此悲歎は見まいもの道理こそ主人の爲に金が入ゆへ兩個して證文に判を捺と姓名まで云ふたなれど此方は一途に盗人とはかり思つた故に貸もせづ剩さへ殿打擲嘸くやしい事で有つたらう許て下され」いなふ」獵角「サア唯今お話申上る通り全く此なる者は小生が家來に相違もなし出來ぬ金の才覺を頼み升たが此方の誤り今更何と申詞もムりませねば何卒此場切に万望御勘辨下さりませう」角「何の勘辨どころじやムらぬお前が鐵鉋打なけりやア將に乃公が殺される處儀の爲には生命の親○併まお前も此様な宜ひ家來を殺して嘸悲しからう何ういふ縁かいわば敵の此衆が咄をさけば可愛想に實に泪が溢れ升る是も定まる約束事と諦るより仕様はムらぬ」獵角「會ひ別れの初とやら神ならぬ身の露知らせ」角「夫も何ゆへ金故に」獵角「あたら命を落せしは」角「世の諺にいふ通り」獵角「金が敵と」兩人「成たよなア」ト此時入相の鐘鳴る」獵角「最早入相イヤナニ旅のお人見られる通りの仕宜故に悪いながらも以前は家來死骸を此儘打棄置も不愍の到りにムり升れば何卒手前が宅までお手傳ひ下さるまいか」角「何の夫は易い事」獵角「萬望お手傳下さりませ」ト是を宜敷鳴物に成り」幸茲に細引がムり升れば」角「そんなら夫を貸つしやれ」獵角「拙者が所持の篋笠にて」ト死骸を篋にて包み細引にて括げ」角「其鐵鉋にて。さし擔ひ」獵角「日暮ぬ内に」兩人「ドッコイ」ト兩人の鐵鉋よて卯之助の死骸を擔ぎ上

「獵角」お出下され「角」どうも歩行ませぬ「ト兩人は歩行ぬくま此仕組宜敷賑ある鳴物にて淺黄襟冠せる跡山おろしにて靡ぎ後の道具出來次第切て落す」

小川村鹽原角左衛門住家之場

本舞臺三間常足の二重板庇の葺御屋根竹にて押へ所々に石の壓を置見附一面粗壁是に獸の皮を干あり上手山の出しかけ是へ莫大なる杉の立樹傍に切出たる松の割木澤山ならべ下手竹藪都而野州小川村鹽原角左衛門住家の体爰より以前の卯之助の死骸を風蒲の中へ入れ二枚折の屏風を建上手に百姓角左衛門下手に獵師角左衛門お清世話女房の持らへにて子役多助同く住ひ居る此見得宜敷合方にて道具納まる」お清「モシ良人今朝訣れる時さへも旦那様をば原の武士にさせたいと言ひ續けに云ふて居たが果は非業か此最期素を糺せば私等二人無理にお金を頼だ故斯した心得違を仕たので有うが如何も遠目とは言ながら右内と獸と間違て撃たとは何ういふ事でもんすへ」獵角「コリヤ〜何を白痴た如何に遠目とは言ながら人と獸類を見違んや此お方へ白刃を向けて懸りし故山賊ありと心得て飽發致したコリヤ〜泣どころじやないお詫申せ〜」清「ハイ〜ツイ悲し取紛れ御挨拶も申ませぬが是なる者は私の妹を家内に致し居り升るもの併も七歳になる女の子もムリ升るし全く盗人根性と申譯でもムリ升ねば是も忠義故じやと思召て何卒御勘忍被成て下さりませ」角「何のお前様勘

辨處か憚る斯いふ事も成のなら談合も仕たものを今と成ては殊も氣の毒でムリ升る」多助「モウシ阿爺何で小父さんを鐵砲で撃たのだへ江戸に居る伯母さんが聴たなら何んなに怒るか知ぬゆへモシ伯母さんが来たならば吾が討たと言ますから阿爺お前は知ぬと云ふてお呉よ」ト是を聞皆々感心のこなし」獵角「チ、多助よう云ふた此の親が間違から頭はない子供にまで苦勞をかけて今更何と後悔の仕様がないわへ」清「端端ゆかぬ小兒でも親を大事と思へばこそ此様に優う云て呉るもの現在家來を非道にも思へば〜お情ないわいあア」多「モウ阿母も泣ぬが〜是から先は吾が早う生長なりお前方に樂をさせやう程にモウ泣のは止て下されや」角「ア、寢に年齢がいかねへが實の熟る木は花からと定めて以前の立派なお武家でムリ升たろうなア」獵角「チ、誠に歎き取り紛れ未だ名乗も仕らぬが拙者事は鹽原角左衛門と申浪士でムリ升る」角「拙者こそは鹽原角左衛門と申農夫でムリ升る」獵角「イヤサ小生が鹽原角左衛門」角「拙者も鹽原角左衛門して貴公は何日から鹽原角左衛門といひ升る」獵角「私の鹽原は先祖からでムる」角「私の鹽原も先祖からでムリ升る」清「ア、モウシ何方も〜モシ姓といひ名前までとは心得ぞモシ貴客此方も先祖の由緒がムリ升れば早う被仰ツたが宜敷ムリ升るわいかア」獵角「スリヤあなたが申さいでも此方より申す所拙者先祖は下野國鹽谷郡鹽原村の郷士鹽原角左衛門といふ事が書類は確も遺り在り」清「シテ亦貴客の

御先祖は「角」サア僕（せんと）の先祖も同鹽谷郡鹽原村で年久しく其後今の沼田へ来て今では田地も
 山も有り原を洗へば同じ先祖「獵角」不思議な事とて武士に「角」此方は銀どる百姓と「清」替
 れど同じ血筋の家柄「獵角」不思議な縁で「三人」ムリ升たなア「ト三人不思議のこなし百姓
 角左衛門は何か感心のこなし有て以前の嗣卷の金を出して」角「サア茲に持合せの五十兩と
 うぞ是で身形を拵へ立派な武士に成て下さりませ」ト以前の金を出すを「獵角」コリヤ怪か
 らぬ其仰せ何故金子を頂戴致す覺はムらぬ「清」殊に一面不識のあたに此様なお金を頂く事
 は出来ませぬ「獵角」何卒お納被成て下さりませ」角「イヤ〜見せ識せでムらぬぞへ知ぬ
 先なら更も角も名乗會は先祖は一ツ」獵角「サ、左様ではムらうなれど何うも是を受ら
 れませぬ」角「夫婦揃て受られぬと言ッまやれど貴公が鉄鎧を打たぬ其時ハ吾の命は喪れる
 所命が無りやア金もなし又此金を兩個の衆が貰ッて江戸へ歸らば死た右内殿が犬死に成
 り升ぞや命を棄ても主人を助けたいといふ右内殿が精神を無にする心かモシ百姓づれでも
 其位な事は辨まへて居り升ぞやサア收て置ッしやれ」獵角「サア御尤ある仰せなれども是は
 つかりはエ、取り申さぬ」清「殊に右内と申た所が原は家來貴客の命を取らば仕たを手討に
 仕たは當然コリヤ良人の云ふ事が尤もムんすわいさア」角「ソリヤ是程云ふても此金を収て
 は下さらぬか」兩人「如何にも」角「此上は仕方がない吾も男子の端末だ此金を持って行譯にも

成らば此五十兩でお内の大事お代呂物をお售被成て下さりませ」獵角「サア夫は折角の事お
 れど四年以前の出水の際に」角「イヤ、ヤせんかみのじやアない爰に居る兩個が中の伴をば萬
 望吾に下されい」ト是にてお清の吃驚なし」清「エ、モウ滅相な事を仰しやりませ何うして
 其様な事が成り升ものか」獵角「殊に一人の伴といひ何して是が貴下様へ」角「何のお前方は
 未だ年齢若吾はコレモウ四十二歳で未だ一人の子も無ゆへ何卒此子を吾に下されい」獵角「
 是はばかりは上られませぬ」角「夫でも鹽原の子を鹽原が貰うま宜じやアないか」清「モシ夫
 はあなた何を仰せ被成まする右内に無心を申たのも此伴をば世に出たい計かり故此義はか
 りはお願を申升わいなア」角「成程そりや一應御尤なれど能うマア考へても御覽なされ貴
 公が江戸へ往つて此忠義お家來をば此地へ埋め其後お前方の江戸へ行此坂峠を越て供養
 に來られ升るか」兩人「エ、」角「サア豈夫來る事は出來升まい吾が此子を貰ッて行けば小生
 の沼田の下新田半日あれば爰迄は萬參はまだな事追善供養も自由じやないか殊も此子の爲
 にも伯父さんに當ると云へば猶のこ子のない昔日と諦て萬望吾に下さりませ」ト是まで獵
 師角左衛門はこなし有て」獵角「成程是も一理ありイヤ御尤差上ませう」角「スリヤアノ下さ
 り升るか」獵角「如何にも」角「ソリヤア忝ない」清「モウシ良夫多助をお遺遊ばし升て」獵角「
 ハテ余が所存もあれば女子の要ざる差出扣へておれ」清「ハ、ア——イヤ」獵角「コリヤ多助」

多助「アイ」獵角「愛へ來イ」多助「アイ」「ト是を合方に成り」獵角「コリヤ多助幼少れども能く聽けよ自今汝は是なる小父御を眞實の親と思ひ孝行を盡せよ又死だ伯父追喜供養を怠ら老夫を汝が勤とせよ必我等ある事を思ふなよ又是なる五十圓は汝が身の祝といふて下されたを此金子にて形容を調へ江戸の邸に歸るから必らせよ養ひ親へ孝行を怠る、なヨ」多「アイ何日でも阿母が抱て寐て阿爺に金があれば江戸のお邸へ歸れるとの話なれどお金が無ゆへ歸れぬとの事を聞たび欲い〜と思ふて居たお金が有は吾は何の何首へでも行まを程にお前は早う往しやりませ」清「チ、能う云ふて呉た可愛やなア〜子供心にも其様に聞分てたもる你をば振捨て行親の氣は何の様であらうなれと你ゆへよ妾等夫婦原のお土も成程にナア此母とて嬉しふ思ひ升る面がコレ多助ヤ必らせ共に長しふ悪ばいへや杯せぬやうよ向でも穩順に仕てたもや」多「アイ〜」獵角「必らせ共に此親は假の親じやと心得て沼田の阿父に孝行しろヨ」多「アイ〜」角「ア、實に感心なものだ斯いふ宜子供を貰ふといふのも因縁だ」獵角「災却て善となる是も右内が忠義の功」清「せめて今夜は出立の悦を」角「祝義不祝義取り混て」清「家來は冥途へ放出立」獵角「此身は江戸へ發足の」角「愛子は目出度養子入り」獵角「思へば不思議な」三人「奇縁じやなア」「ト此以前より悪者權十下手にて内の容子を聞居て」權十「ヤア愛の角左衛門は人殺此の通を爾だ」「ト言ながら一散に向へ走り這入」角「是聞れたら面倒な」清「殊に日頃の彼兇漢」角「迹追蒐て」「ト皆々息込む」獵角「日頃よりして悪たれ者の彼權十諸人の爲ちり我身の爲め」「ト鉄鉦に玉込するを兩人して」角「スリヤ亦短氣な」「ト押へるを振り拂ひ門口にて片手だめしよ向ふへ向け發鉦是を本鉄鉦の音にて戸家の内まで」權十「ハア、ハア、ハア、」獵角「慥に手ごたへ」「ト鉄鉦を突のが木の頭多助は音に驚きお清に抱さ付お清は多助を抱さ上る百姓の角左衛門は恟りなして獵師の角左衛門を見込む獵師の角左衛門は向ふを見込此仕組宜敷替つた鳴物にて」○拍子落

り這入」角「是聞れたら面倒な」清「殊に日頃の彼兇漢」角「迹追蒐て」「ト皆々息込む」獵角「日頃よりして悪たれ者の彼權十諸人の爲ちり我身の爲め」「ト鉄鉦に玉込するを兩人して」角「スリヤ亦短氣な」「ト押へるを振り拂ひ門口にて片手だめしよ向ふへ向け發鉦是を本鉄鉦の音にて戸家の内まで」權十「ハア、ハア、ハア、」獵角「慥に手ごたへ」「ト鉄鉦を突のが木の頭多助は音に驚きお清に抱さ付お清は多助を抱さ上る百姓の角左衛門は恟りなして獵師の角左衛門を見込む獵師の角左衛門は向ふを見込此仕組宜敷替つた鳴物にて」○拍子落

明治二十二年六月十九日印刷
明治二十二年六月廿一日出版

定價九錢

大阪府下東成郡西高津村
六百八十九番屋敷平民

著作
兼發行人

勝 彦兵衛

版權登錄

印刷者

前田菊松

大阪府下東區備後町五丁目
二十四番屋敷

版權及發行
所有權